肢体不自由教育部門　小学部
研究テーマ
「児童が自ら考え、行動する授業づくり」

1　研究の目的と方法

学校研究テーマ「一人一人が主体的に活動する授業づくり」

肢体不自由教育部門小学部では、どの児童に対しても、
「児童が自ら考え、行動する力」の素地を育て、その力を伸ばしていくことが
一人一人が主体的に活動する場面を増やし、生きる力を育むことや自立につながると考えた。

そのためには、児童が「できる」「わかる」「伝わる」ような手だてを用いることが必要である
と考えた。

【学部研究仮説】
「できる」「わかる」「伝わる」ような手だてを用いることで、児童は自ら表現するようになる

2　研究の実際（自立活動の指導を主とした教育課程　５年　朝の会）

（１）対象児童の実態等　と　グループの研究仮説

【実態】
・名前を呼ばれて席を立つ時や顔写真カードを貼って席に戻る時に、教師が背中を押して促すことがある。
・出席確認ボードの「おやすみ」の枠内に写真カードを貼ることが多い。

【主体的な姿】
出席確認の一連の活動（名前呼び,写真カード貼り）を、一人で行う。

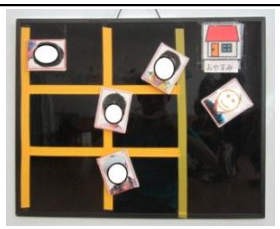
【手だて】
・自分で立ち上がることができるように椅子を改善する。
・必要に応じて、児童の後ろから手を添えて一緒に写真カードを貼る。
・出席確認ボードを実態に合ったものにする。
・本児からの動きが出るまで待つ。

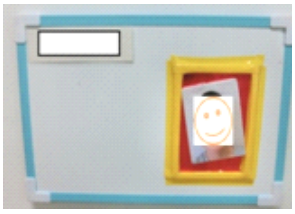
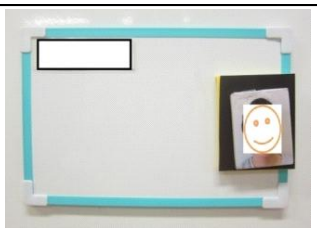
【研究仮説】
朝の会で、児童の実態に応じて、自分で動ける環境づくりを行い、「できる」「わかる」教材を提示して、児童が動き出すまで待つことで、児童は一人で活動するであろう

【検証方法】 以下の項目について５日間記録を取り、記録をもとに支援を一つずつ改善する
・対象児童が席を立ってから、写真カードを貼り着席するまでに、教師が支援（示範、声かけ、指差し、身体的補助）を行ったかどうか。
・顔写真カードを出席確認ボードの枠内に貼れたか。
・顔写真カードの向きを正しく貼れたか。

（２）実践経過　　:手だて　　:結果　　:考察

ここでは、児童Bにとって「できる」・「わかる」教材になるように改善を行った経過を紹介する。

改善前	改善①	改善②
		
・昨年度使用していた出席確認ボードを使用した	・おやすみマークを取る ・本児にカードを貼って欲しい場所に色紙を貼る	・ボードの右側にも枠を設ける ・枠を立体にする
・身体的補助を行った（4/5回） ・「おやすみ」の欄に貼ることが多かった（3/5回）	・指差し・身体的補助を行った（各1/5回） ・ボードの右端にカードを貼ることがあった（3/5回）	・身体的補助を行った（3/10回） ・右端の枠内に貼っていた（10/10回）
☆おやすみマークを目印にしているのではないか	☆ボードの右端に貼っているのは、手を動かすのが少なくてよいからではないか	☆出席確認ボードを個別に用意すると、分かりやすいのではないか

改善③	改善④	改善⑤
		
・ボードを一人ずつ分ける ・枠を立体にする ・枠の大きさは、カードの大きさに合わせる	・カードを貼る場所を枠線で囲むのではなく、一段高い面にする	・カードを貼る面をボードの右端にする
・身体的補助を行った（3/5回） ・枠線の上にカードを貼ろうとすることがあった（2/5回）	・身体的補助を行った（3/5回） ・カードを貼る面の隅や、右側の余白に写真カードを貼ることがあった（3/5回）	・身体的補助等の支援は行わなかった ・カードを貼る面の中に、カードを貼っていた（5/5回）
☆枠の中にカードを貼ることが伝わっていないのではないか	☆カードを貼る面の右側に余白が無いほうがよいのではないか	☆カードを取ってから貼るまでに裏返ってしまうことがあり、カードの改善が必要である

（３）結果と考察・課題

児童Bにとって「できる」・「わかる」教材とは、出席確認ボードの右端に写真カードをすぐに貼れるような面を設けたものであると推察される。写真カードは今後も改善する。

3　研究の成果と課題

【成果】〇児童の主体的な姿を引き出すことができた。

〇児童の興味・関心を生かした題材、教材の工夫等、有効な手だてを確認できた。

〇仮説検証型の研究を行い、できるだけデータに基づいた分析を行ったことで、グループの教師が同じ視点で授業改善に取り組むことができた。

【課題】〇手だての有効性を検証する方法や回数等を、予め決めて取り組む必要がある。